

論文審査の結果の要旨

氏名 常盤 智子

本論文は、幕末明治初期の英学会話書の成立とその日本語について、ローマ字表記(第1章)、原拠の確定と版の違い(第2章)、同時期の国内資料との比較(第3章)、新発掘資料(第4章)、という四つの観点から探ったものである。

第1章では、E. M. サトウ著『会話篇』の「エ」のローマ字表記に五種類(e, é, ë, y e, yé)の書き分けがあることに注目し、その分布から補助記号は、日本語の「エ」を正しく再現させるための表記上の工夫であることを明らかにする一方、「ye」は[je]を反映するものと推定している。さらに、『会話篇』の再刷本、およびサトウの他の著作に見られる「エ」の表記を調査・検討し、サトウ個人においても、著作の刊行年に伴って表記方針が変化していく様子を跡づけることに成功している。また、英学会話書・辞書のローマ字表記や、ローマ字表記についての論争、音声資料などを参考に、当時におけるローマ字遣いにおいて、表記と音声の乖離する場合があったことを確認している。

第2章は、書誌的研究と版の違いを利用して、英学会話書の成立の背景と、その発展の中での日本語の変化の姿を明らかにしたものである。具体的には、まず英学会話書の嚆矢といわれる『英和日用句集』が唐話資料『南山俗語考』をもとにしていたことを明らかにし、書誌的事実を確定している。そして、『英和日用句集』諸版の再整理を行い、混乱を整理し、研究の基盤を確固たるものにしていく。その成果を用いて、一人称・二人称代名詞の幕末から明治における変化の一側面を同書の版の変遷のなかに見出すことに成功している。さらに、英学会話書『英和通弁手引草』が『英和日用句集』と関わりが深い資料であることを実証し、その日本語の『英和日用句集』からの変異を明らかにしている。

第3章は、英学資料と国内資料の異なりを検証したもので、三遊亭円朝述『恠談牡丹燈籠』と、B. H. チェンバレン著『日本口語便覧』所収のローマ字書きの『BOTAN DÔRÔ』との異同を示し、そこにみられる口語の具体相を記述している。

第4章では、ロンドン大学所蔵の『会話篇』への書き込みが、刷を改める際の契機となった資料であることをつきとめている。またケンブリッジ大学所蔵のサトウ自筆資料「日本語練習帖」を、目録の裏紙として綴じ込まれているという閲覧の困難をのりこえ翻字し、『会話篇』成立の過程に深く関わる資料であることを明らかにしている。

『英和日用句集』が『南山俗語考』をもとにしていることを確定したことは、英学会話書を近代日本語資料として位置づける上で重要な発見である。また、英国の図書館において新資料を発掘したことも英学会話書の成立・変遷の研究、および今後の洋学資料研究に大きな影響を与えるものである。

ただ、ときに形式上の不統一が見られる点、および第1章におけるサトウの「エ」の書き分けの問題を、英語の綴り字と発音の関係を重点に分析していればより説得力のある論になったと思われる点が惜しまれるところである。

しかし、資料の書誌的研究を重視し、内的な実証と外的な根拠を博搜するなかで、英学会話書の日本語を見つめ直そうとする態度は評価でき、それによって、通説の混乱を正した功績はおおきい。以上より、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。